

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成16年
11月号

毎月23日発行
通巻411号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成16年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



モチツツジの返り咲き(拝殿横石垣) 矢追 房子さん 撮影

平成6(1994)年11月23日月次祭法話より

宗教は社会福祉の心(上)

法主 矢追日聖

あすかえん
安宿苑文化祭に
宗教の世界を見る

おはようございます。今日は十一月の月次祭でございますが、大倭安宿苑の文化祭でしたので、この祭典が少し遅くなりました。偉いのかどうか知らんけど、一応、私が理事長になっておりますので、ちよっと挨拶をしてほしいと言われ、朝からずつと行つて参りました。

皆さんには心配をかけてる面があるんで、始めにそのことでちよつとお知らせしておきます。心配をしようとお気の毒でございますのでね。

先月の二十八日からね、別荘住まいをしますねん。そう言うとかつこよろしいんやけど、別荘というのは病院のことなんです。世間並みの言葉では入院ということになるんで、どが悪いのかと心配してくれるのが、これ人情やと思うんです。

実は入院するにも理由がありましたね。私は色んな役をしますので、病院で検査を受ける義務もあるんですよ。それで血液から、頭の前から足のとこまで色々検査してもらつと、コレステロールというのが基準よりちよつと上の数字が出てるんやわな。言うたら血管に垢が溜まつてんのやろな。そら八十年から使つてんのやから、まあ当たり前のことやと思う。その垢を掃除するような薬も貰つてますねん。まあ強いて言うたらそれだけのことなんです。

ところが三、四ヶ月ぐらい前から、右

足だけ、太股から足首までの間がチヨツチヨツと膨れて太くなつてね。これ普通の肥えてんのところが、やつぱり腫れてるんです。足の脛の骨のところを指で押さえたらね、ポコポコとへっこむんです。まあ年をとつたら、ようこんなふうに浮くのやなあ。もし顔でも浮いてるんやったら、腎臓からくるとか言うんやけどね。左足はどうもない、右足だけなの。ちよつとまあおかしいわいと思つたけど、別に歩くのに不自由ないし、痛いことないし、知らん顔しとつたんです。

ところが、この間の検査の時にね、医者に言うたら水が溜まつてるそうや。ちよつと検査しようと言われて、その日から病院にほり込まれてますね。大倭病院の院長もね、「法主さん、あんたがこしらえた病院やないか。自分とこの別荘や。遊んどつたらええがな」と言うんです（笑）。

けれど、出て行く時には出て行くしね。今日も大倭安宿苑の文化祭に行ってきました。十一月二十一日から三日間、安宿苑で生活してる人や職員さんや色んな人達の作品の展示したり、それからまた模擬店とかやるんです。やつぱりね、公の施設の中で生活しておるから、自分で勝手に物を買に行けるわけやないし、世間の色んな事を経験させてやりたいと思うでしょ。何言うたつて集団生活やから、家族とも会う機会が少ない。今日のような時に、それが文化やわな、家族にも来れる人は来てもらう。そして一緒に楽しむ——「あじさいの箱」の人やとか、ボランティアの人がみんな寄つて模擬店をしてくれてます。私も今日はそこでうどんをよばれてきたけど（笑）。

まあ、あんた達、安宿苑に入つてるような人が一人、自分の家族におつたと仮定してみい。そりゃあ、家族の人が気の毒やと思います。障害があつて自分だけではどないも生活できない人やと

か、だんだん頭が老化して痴呆の出たお年寄りやとかが、家族の中におつたら、二十四時間、目を離されへんやろ。留守番なしでは外出もできない。家族のリズムが全部狂つてしまうんですよ。その一人を、こちらの施設でお世話することによつて、家族みんなが救われるんです。

長曽根寮というのが特別養護老人ホーム、身体障害者 心身障害者の入つてるのが菅原園です。私はこの二つの施設長をやつていたこともありまして。だから今日でも見たらね、私が現役の頃に入つてた人らが、まだ沢山残つてます。それはやつぱりうちの寮母さん、職員さんがほんまによつて倒みてくれるということなんです。食べるものから、健康管理から、色々やつてくれるんで、皆それだけ長生きできてると思うんです。個人の家庭だったら、施設みたいには健康管理もできませんし、自分で食べるんやつたらまだええけれども、いちいち口開いた時にポソソと入れてやるような人もおります。そんな人が家族におつてごらん、家族みんなが大変ですよ。そういうようなところから見ても、施設があるということは幸せやと思つう。

まあ世間には、施設を廃止せえと言つてくる人もおります。ここにそういう運動に来た人に、私はうちの施設の中に連れていって、入つてる人から、いつべん意見聞いてこいと申うたことがあるんです。そうしたら、ここがええと言つてすわ。それは、右と言つたら左と言いたい人もおるやろし、世の中というのは様々ですけれどもね。

今日もね、家族の人が出て来て、一緒にうどんや色んな物食べたりに喜んでます。あんな姿を見たら涙出ます。中には会場に出てくることのできないような人もおりますけれども、うちの寮母さんがいちいち買つてやつてね、運んでやつてく

れてるんです。ああいうような姿を見た時に、私は、そこが宗教やと思います。

今、あんた達がしているみたいに、ここで神さん拝んでるのが宗教だというのは違いますよ。これは遊び。聖歌を歌つて喜んで、これは遊びやねん。みんな歌謡曲歌つて遊んでるやろ、それと一緒に（笑）。みんな喜んでおるんやから、これはこれで結構なんです。

そやけれども、今日の安宿苑のような行事を見てもらつた時に、足の動かん者には寮母さん達が提げていってご飯食べさせてあげたり、また家族の人とも久しぶりに一緒にご飯食べたり、そうしてみんな喜んで、ああいうような雰囲気醸かしておる……これが宗教の世界やと思つう。

大倭の宗教とは

大倭の宗教はね、そういうところに実体があるんです。ただ神さん祀つて拜んで、御利益もらうというような、贅沢なバカげたこと思わんといほしい。どれだけ神さん拜んだつて御利益みたいなもの滅多にくれはることはないやで。自分の病気は自分で治さなあかん。

これがまた言うこと聞くような神さんやつたら、私のこの足、こんな太うなれへんがな（笑）。ちよつと二、三年ぐらい前にもね、ペーチエツト病という皮膚病を患うたことあねん。手術せんとほつといたら癌になります。それでまあとにかく、股の患部から皮を取つてね、背中から剥いだ皮を貼つてもらつてあねん。今はどうもないねんけど。年やから竿使う必要ないけど、小便だけできんとあかんしね（笑）。神さんに頼んで、神さんが言うこと聞いてくれるんやつたら、私がこんなことになるはずないねん（笑）。

そやからあんた達もね、信仰したら御利益貰えるやとか、病気になるたから神さん拜んだら治るとかね、そんなこと思わんといてほしい。

神さんというのは、お医者さんやとか医学の知識を、人間にちゃんと与えてくれてるんだから、皆、肉体の病気はその職にあるお医者さんを頼ってくれたらよろしい。ただ、心の問題になると、お医者さんだけではどないもならないこともあるかしれんけれどもね。

それよりも、人間同士が仲良くなって、お互いに自分にある力を出し合って、いわゆる相互扶助で世の中を楽しく暮らして幸せになつていく、それが本当の宗教の世界なんです。だから大倭の宗教は、今日のような安宿苑を見てほしい。

この拝殿には光明皇后さんを祀って置いてあります。光明皇后さんが、昭和二十二年、私がこの場所に来た時に出て来はつてん。まあ、私はこの話を何遍もするさかいに、またかと思つてボサッと聞く人もおるやろけど（笑）、中には初めて聞く人もおるし、今日は特に安宿苑（※光明皇后のお名前の安宿媛からの名称）の文化祭でもあるから話すんやな。

光明皇后さんが出て来はつたと言っても、皆さん方には分らん話やわな。それは一人一人誰でもお役目というのを生まれつき持つてんのや。私の場合、肉体の無い人間と交流できるものが、この頭の中にちよつと入つてますね。その部分は、普通の人からみたら精神分裂ということになんねん。分裂ではないけど分裂と一緒にみたいところがあるんやね。

私の宗教修行

ここの敷地が、須加宮寺と云うて、奈良朝の聖

武天皇の時代に光明皇后さんが作られた尼寺やつたんです。それが廃れて山野になつてしまつてたんなやな。何の因縁か知らんけど、私がまた終戦直後の昭和二十二年にここへ移らんならんような事情になつてきた。それでまたここが私の所有する土地になつておつた。まあ、そういう様な宿命やつたんかしらんけどもね。

光明皇后さんの、肉体の無い霊体が出て来はつたんやね。ちようどライの病人さん達を世話してはつた年頃の、どうもあの顔見とつたら三十歳ぐらいかなど思うんやけどね。出て来た時に紫陽花の花を提げてはつてん。

聖武天皇は、国家鎮護のため東大寺（※総国分寺）や全国に国分寺を建てはつたし、それでまた光明皇后さんは――女には何か知らんけど、わたしは知らんで、何か罪障があんねんで（笑）――女の人の罪障消滅のためにと云うて、国分尼寺を全国に建てはつたらしい。今もう残つてるのは少ないやろ、跡は残つてるかな。そういうようなことをしてはつた人やねんな。

だから、蓮の花でも持つて来はるんやつたら話は分かるんや。紫陽花の花を持つて来はつてん。私は、おかしいな、光明皇后さんはえらい変わったもん好きやねんと思つたんや。

その時また、「地下水の如く清く流れ、紫陽花の如くに美しく咲け」と、聞こえてくるねん。

地下水の方は、地下水のような気持ち、そんな心になつてほしいと、分かりますよ。木が育つのも、皆これ地下水があるからや。けれども、紫陽花の意味が、何のことか分からんかった、その時はね。

私は、心の中では宗教嫌いやねん。坊さんも嫌いやし、金持ち嫌いやしね（笑）。別に憎いことはないんやで。憎いことはないねんけど、自分に

やれと言われたら、自分はいややということや。

ところが、「宗教で行け」と言われる。何したらええかも分らない。けど、終戦の直後でもなんね、世の中もうえらいこつちゃ。戦災で焼けた大阪の街頭に立てと言われて、一番最初は梅田の駅の前で社会福祉について喋りました。原稿も書いていくわけやないし、何にも考えてないねんけどね、まあ何か知らんけど勝手に出てくるんや。

警察から文句言われるねん。人が大勢寄つて来るから交通妨害になる言うんや。服装は上も白、下も白い袴をはいてましてん。そんな格好して歩いてたら、車で行く人が横向いて事故起こしよる、とかな（笑）。まあそんな時代でした。

それからまた、ここで「百姓せえ」と言われたから、牛も飼うて、農具一式そろえて、経験のない百姓やつてたんです。だから、日曜には外へ出ていつて、それ以外の時には百姓してたんです。百姓の仕事、農耕やわね、それが宗教やと言われました。何でかと言うと、種蒔くでしよ、発芽するでしよ、それ放つておいてみなさい、草が生えたり虫に食われたり、ベチャンとなつてしまします。自分が種を蒔いたら、それを育てていく行動がなけりやいかんわな。その時ね、子供を産んだら親はどうするかと言われるんや。

土から色んなことを教えられた。夜中に虫取りに行つたりもしました。そうせえと言われるねん。そんな時分、金も無いし薬みたいなん使われへん。ほんまに無農薬やから、虫つきますがな。夜中に夜盗虫が出てくるから、こつちも夜起きて、ワラとほうき提げて行つて、バタバタバタバタ、葉に止まつてる黒い虫を取るのや。

結局それは、人間を育てる心を教えられたわけやな。土から出てくる天地自然の恵みとか、また出来た物を育てていく心、そういうようなことを

教えられたわけ。それが私に対しての宗教の修行やった。何も座禅するのが修行違いますね。

それで日曜日になったら大阪へ行って、それも行った場所によつたら、でたらめで何喋ってるのか全然分からへん。そやけど聞いてる人は、何か感激でもしてくれたんか、涙こぼしてる人もおれば、また一緒に連れて帰ってくれと言ってくる人もおるし。阿倍野の橋の上でやつとつたら、あそこら浮浪児がぎょうさん居るし、連れて帰った子もおるわ。まあそういう色んな事をその間に経験して初めて、私は、これが宗教やなということが分かったんです。

今日は月次祭やから、私もこんな教服着て、皆さんの前で喋ったり拜んだりしてます。けど、これがほんとの宗教というのは違うんや。ただのお遊びやけれども、ものにはまた節度というものが無いといかんからね、やっています。

今日の安宿苑の行事もね、言うてみたら宗教の行事なんですよ。

(続き)

「隆家」の頃の法主 (11)

村長選への立候補

矢追 隆義

兄が自らの記録として書き残している「大倭二十年史」(※昭和40年7月23日大倭新聞第11号)の中に重要な項目が抜けているように思う。何で書かなかったのだろう。あの時、兄の考え通りに事が運んでいたら……。今日の大倭紫陽花邑の存在はあり得たであろうか？

昭和二十六年こそ兄の人生において、神のみぞ知る運命が待ち受けていた年であった。

敗戦後、米軍の進駐により占領政策の一環で「民主主義」を強要されることになった。その最たる政策の一つが、昭和二十二年の地方自治法改正であった。中でも特に目を引いたのは女性に対する参政権の付与であった。この法改正に伴い、我々がかつて経験したことのない方式で、国会議員、県市町村議員及び首長の選挙が全国一斉に実施され、それには女性もたくさん立候補したのである。

富雄村では、阪本嘉市郎氏が初代村長として選ばれたが、昭和二十六年の次の選挙には辞退されたため、吉崎次郎、松本誠一(伍史)の両氏が立候補された。

その中へ予想だにできなかった第三の人物が現れる。その人物こそ兄であった。

吉崎氏は中国大陸でかの有名な東亜同文書院を卒業され、上海、南京で幅広く軍の庇護の下、吉崎洋行財閥としてトラック等による運送業をされていた方で、村内に立派な実家があり、知人親戚等も多かった。

他方、松本氏は農地解放政策に伴う村内の自作農創設の難事業と取り組んで、各大字内の農家や地主と常に接しておられ、又かつては青年団長もされ、地元の人であれば知らぬ人はないくらい的人物で、選挙には強い地盤の持ち主とされていた。

これら二人の中へ何の恐れもなく、兄は民生委員として見聞した村民の声や、古代史にまつわる史蹟顕彰への熱意等で、選挙参謀や組織作り、資金等、選挙の裏表も解らぬまま独自の決断で立候補したと思われる。(神秘的な暗示でもあったのか?)

兄の立候補で一番驚かれたのは松本氏であっただろう。何故なら彼の妻と、うちの叔父(父の弟)の妻は実の姉妹であるし当然応援を受けるものと

信じていたはずである。この兄の立候補こそハブニングとでも言うのだろうか、大変な事になったのである。

殆どの村民は松本氏の当選を確信していたが、兄の立候補により大勢は一変、吉崎氏が当選という開票結果となった。漁夫の利を得たとも言うのであろうか。

当日、祝杯をあげるべく、松本氏が一同と吉報を待ち受けていたところへ届いた一声は、「落選」であった。彼は持っていた杯を落とし倒れこんだとのことである。結局、兄の取った票が彼の当選を左右したと言われたが、吉崎陣営は上手に女子青年団を取り込んで票集めに成功したとの見方もあった。

選挙に敗れた兄は民生委員を辞し、大倭紫陽花邑の確立に力を注いだとも思える流れになる。

昭和二十九年には宗教法人法による宗教法人大倭の文部大臣認証を受け(※昭和三十一年の時は宗教法人令により設立登記)、昭和三十年には今井富蔵氏等との連携も良く、社会福祉法人大倭安宿苑の創設をみる。

これが又、不思議な事に、かつての選挙でひや飯を食わされたと言われた松本氏は当時、市会議員として活躍されていたのだが、怨讐を越え、安宿苑開設に際しての行政面からの貢献は実にすばらしく、谷井友三郎氏の理事長就任なども彼の力添えによるものであった。

振り返ってみれば、一体あの選挙は何であったのか? もしあの時、松本氏が当選していたら? もし兄が村長になっておれば? それぞれの歩んだ道も変わっていただろう。人それぞれ神のみぞ知る道を歩んでいるのであるが、二人にとつて落選したことが、禍と出たのだろうか、福と出たのだろうか。

風ぐるま

僕のなかの大倭紫陽花邑

北海道 上川郡 東川町 塚田 高哉

皆さんお久しぶりです。覚えてない方も多くおられると思いますが、北海道に住む塚田タカヤです。

今年の春突然思い立って（娘の高校入試がおり家族旅行）懐かしの関西へ。もちろん一番の目的は大倭紫陽花邑を訪ねることでした。法主さんが霊界に旅立たれた時も、母さんが逝った時も僕は大使に参ることが出来ませんでした。一度拝殿や齋庭に向かい、法主さんと母さんのことを思い、心からの感謝とお礼の気持ちで、彼の地で拍手合掌したかったです。

日元さんと一緒に肥後みをした畑、古い拝殿、プレハブの小屋などはすっかりなくなり、立派な病院や施設ができていて、邑の皆さんの家も新しくなり、その様変わりには驚きましたが、なんでしょう……流れている空気とでもいいでしょうか、「氣」みたいなものがそこには変わらずあり、「ああ、ここがおおよまとだ……」と心と体が思い出すような、心の故郷へ帰って来たような気持ちに僕の心は自然になっていました。

齋庭や法主さん、母さんの住んでいた建物の入り口近くまでいって見ました。そこは当時とまっ



昨年、アイヌの人達とラトビアへ行った。ラトビアのビールはおいしかった！

たくかわらず、裏口に廻り、ノックをして「かあさん！」と声をかけたくなるような感じでした。でも、入り口の陽だまりに猫がまるで番をするように寝ていて、「起こしたらあかんあ」という気持ちになり、そこで合掌してお辞儀をして池の上へ戻りました。

ちょうどそのとき、しょうちゃんの声が聞こえてきて、そして殆ど変わらぬその外見に驚き、僕は抱き合って再会を喜び合いました。

行くことを事前に何の連絡もせずいったのですが、日元さんにもお会いできたし、杉本さんご夫妻ほか数名の方と再会できましたのも嬉しかったです（哲さん、岸野さん、のつちゃんたち、ごめん）。お元気な日元さんのお姿が拝見でき何より幸せでした。

私事ですが、この二年程体調を崩し、入院を繰り返しておりました。悪性のC型肝炎に罹患してしまつたのです。一時は死をも覚悟したほどでしたが、現代医学の力を借り、認可されたばかりの新薬で、お医者さんも驚くほど回復し、血液中に巣食っていたウイルスも見事にいなくなつたのです。しかし薬には副作用、リスクは付き物です。その強い薬の副作用で酷い鬱病になってしまつた（なんと！）ってその状態を説明したらいいか……半分幽体離脱でもしているような感じでした。幻覚みたいなものを見たり、妄想に囚われたり、家族や友人たちには大変心配をかけ、また迷惑もかけました。そして、周りからの暖かな励ましや応援のお陰で薄皮をはぐように病状も良くなつたのです。僕の病院生活の枕元には以前法

主さんから戴いた手拭が何時も置かれていましたし（カミサンがもってきた）、祈りの言葉はいつも「なもたかまのはら」でした。現世利益のために祈ってはならぬと法主さんがいつも言っていました。結局凡夫である僕の最後の神頼みはいつも「なもたかまのはら」と祈ることでした。

野草社で働き、プレハブの小屋に住み、タバコ代等の小遣いにも困っている僕をみかねてか（笑）、母さんがその当方で十万円相当もするピアノ調律工具を買ってくださったことがあります。僕が調律の免許を持っているのを知った母さんが気を遣って、「これでアルバイトして稼いだらいい」と言ってくれたのでした。いまでもそのピアノ調律工具を大事に使わせてもらっている仕事をしています。工具を見るたび、母さんの優しい顔思い出します。

僕にとつては時間的に二年ほどすまわせてもらっただけの「大倭紫陽花邑」ですが、その二年間でいったいどれほどの目に見えない「宝」を頂いたか計り知りません。

今僕はピアノ調律の仕事のほかに相変わらず音楽の仕事もやり、二足のワラジをはきつつ仕事をしています。北海道に住む僕の歌の中には先住民であるアイヌ民族のことを歌にしたものがあります。

地元のアイヌの友人と親しくなるにつけ、その宗教観と、法主さんが語っていた、「霊界にはいい神さんもいるし、悪い神さんもいる」といっていただく方も全く同じで、驚かされたことがあります。法主さんがお清めするときの動作などもアイヌのカムイノミ（神事）の動作と良く似ていて驚きました。

何か不思議な縁があつて、僕は一時奈良に住み、そこで何かを感じ、学び、また自分が産まれた北海道に戻り、心の中でいつも「なもたかまのはら」

と祝詞をあげ、自前の祭壇にはアイヌのイクパシイ（お神酒をカムイに捧げる箸）と法主さんと母さんと一緒に写っている写真が飾られています。法主さんはきつと、「写真なんか飾ったって効果なんてないで」といつて笑われるかもしれませんが……。

「こだま」と「だま」

鹿兒島県上尾久町 手塚賢至
9月号に書かせてもらったことを機に、改めて屋久島の山岳信仰、岳参り、山の神まつり、益救神社の起源、等々について、ひとつひとつ確かめてみるつもりです。早速、先月、高平岳の山頂に行ってきました。

『おやまと』は法主さんの言葉をはじめとして源泉です。多彩な人達の登場と情報、そして大倭の日常を「あじさい日誌」に読みながら、私自身も奈良の大倭の地と同じ空気の中でいるような感じをうけて、そのことが、この時空を共有しているという感覚が『おやまと』をいつも心待ちにする理由のように思えます。

「こぼれずみ」 大阪府和泉市 河野龍子

子供の頃から、目に見えない「何か」の存在を感じながら、大切なことを忘れていくようでもあり違っているようでもある……そんな違和感を深く追求するわけでもなく過ごしてきたのですが、上の子供のアトピーと卵アレルギーをきっかけに、実家の畑を借りて無農薬の野菜を作ろうと畑仕事を始めました。種をまいて、ほんのちよつとお世話をするだけで、おいしい野菜を育ててくれる自然に感動しました。求めていた「何か」に近づいたようで、野菜の出来、不出来にかかわらず充実感を得ることができました。

幾冊かの本との出会いも法主様のテープ起こしをさせて頂いたことも、それぞれがその時その時

の道しるべとなりました。法主様のお言葉の「必要な時に、必要な物を、必要な分だけ、神さんが与えてくれる」は、本当にその通りだと思います。

第十六回 大倭会文化講演会報告 ●●●●●

「古代人の水と森への想い」

「古代人に見習って森を守れば、きれいな水を守れるんです」と講師の成瀬匡章さんは、去る十一月十四日の大倭会文化講演会で、静かだが力強い口調で語ってくれました。この日の講演会では、吉野 宮の平遺跡の発掘にかかわった成瀬さんが、その経験を中心にして、「古代人の水と森への想い」というテーマで語ってくれて、参加者からは熱心な質問が次々と飛び出して、講演会（参加者51人）に続く懇親会（40人参加）でも質問が途切れないという熱い展開になりました。

成瀬さんは宮の平遺跡のすぐ上にある川上村の「森と水の源流館」で勤務しています。川上村では、吉野川 紀の川源流に位置する約七四〇ヘクタールの原生林を購入し、「水源地の森」として保全しており、「源流館」もその重要な一環を荷っています。写真は去る十月三十一日に「源流館」が主催したその森のツアーに



林修三 山本栄二 井手泉さんと私で参加した時のものです。が、「もののけ姫」の森のような自然の氣に充ちたところで

「大倭会」のご案内

■平成十六年十一月二十三日（祝日）

大倭六十一年 元旦。

法主日聖師のお誕生を記念する祭典。

○午前十時、法主様の奥津城にお参りして、午前十時三十分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

○午後一時より大倭安宿苑長曾根寮の「あじさい広場」で祝賀の直会演芸会が催されます。

○昼食は直会弁当を用意しますので、どんな様もご遠慮なくご参集下さい。

●直会演芸会の係では、今年も出演される方を募ります。

●あなたのやりたい事をやって共に楽しませて下さい。

●時間十分前後くらいです。

●十一月十五日まで受け付けています。

直会演芸会実行委員会

TEL 〇七四二一四四一〇〇二番

青山法義・中島武宣迄

した。

森や水にわれわれ人間が生かされていることを、成瀬さんの水の神や神奈備や龍神の話しを聞きながら、深く思い返さざるをえませんでした。詳細は後日紹介の予定です。（岸田 哲）

寸 莎

第62回

溝 口 ツヤ子さん



先人の教えに導かれて

今回登場してもらおうのは、「あじさいの箱」の活動で手まり教室をされている溝口ツヤ子さんである。

ツヤさんは、九州は水俣の沖合に浮かぶ御所浦島（熊本県）の天草郡御所浦風口に、四人姉弟の長女として生まれた。家の周囲は海と山に囲まれ、物心ついた頃には海で泳いでいたという。

小学校に上がるまでは映画が好きで特に時代劇物を毎日のように見に行った。そのせいか、山では男の子達とチャンバラごっこをして遊ぶのが好きであったようだ。

島での男達の仕事は、鮮業、旅館、漁業組合、漁師、雑貨屋、僧侶、その他は出稼ぎに出る人が多かった。父親の竹地菊則さんの仕事は漁師であった。漁に出れば一年の内、盆と正月の一ヶ月ずつしか帰ってこれな

かったので、たまにしか会えない父親とは距離を感じていたという。しかし、晩年父親が病に伏してから平成十一年に帰幽されるまでの間、看護をしながらいろんな話を話し合うことができた。「あーこれで親子になれた」と実感したという。「何にもしてやれなくて申し訳ない」と菊則さんは言われたそうだ。

母親の恵美子さんと、山へ一緒に柴刈りや山菜を採りに出かけた。畑仕事を手伝った。段々畑で肥を運ぶのは難しかったようだ。夜は大好きな祖母のやさしさの中で眠った。

小学生にもなると、ツヤさんも家庭での一働き手となった。朝の雑巾がけ、未っ子の子守り、夕食作りである。食事や掃除の作法は祖父に教わられた。食事中は正座をし足が崩れると火箸がとんできた。無駄口を言わず、音をたてずに食事をしたのだという。

中学生になるとバレーボールに熱中した。丁度東京オリンピックがあり日本が優勝した年で、ツヤさんもオリンピック選手になる事を夢見た。クラブ活動では、「他校と練習試合をするために、仲間と船で島から島へと移動したのは楽しかった」。

元氣なツヤさんであったが、十七歳になる頃から体調を崩し入院を繰り返した。この頃の事は思い出したくないという。先の見えない不安に苦しめられたが、二月頃になると、病院の窓から風にとつてやってきた春の香りに心癒された。

十九歳の時、父親が大阪で関西電力下請けの仕事をしていた事もあり、家族で引越す。母親と共に関電内の売店で働いた。そして二十歳の時、関電の社員で後に夫となる溝口富士男さんと出会う。初めてのデートでは律儀にツヤさんの母親に許可を得て遊びに出かけたそうだ。

二十三歳で結婚、その時二人は三つの約束を交わす。「うそをつかない事、隠し事はしない事、何でも話そう」。また、夫の祖母には、「喧嘩はしてもいい、しかし、どんなに腹を立てても必ず夫を玄関まで見送りなさい。男は外で働くので何があるか分からんから、絶対に後悔だけはせんように」、「子供には自分がどんなに腹が立っていてもたいたい

はいけない。言い聞かせたら分かるもの。夫は妻をたたいてはいけない」と学ぶ。二人の間には待望の長男勝巳さん、長女真弓さんが誕生した。

大倭とは、同じ社宅にいた且田、湯浅さんとの縁で出会った。且田さんから「奈良に人の心の奥底までみえる人がいる」と聞いた。秘密もたくさんある事だし、なるべく行きたくないと思っていたのだが、どうしても相談したい事があり訪ねる事に決めた。

法主様の第一印象は、「目の鋭さ」であった。相談事なので小さい声で法主様に話していると、「もうちょっと大きい声で話してくれへんか。わし耳聞こえにくいねん」と言われて驚いた。その日の出合いが大倭へ毎月のように通うきっかけとなる。

小さい頃から、忙しくしていた両親に甘えられず、人にも相談できずに一人で考え答えを出してきたツヤ子さんであったが、「法主様には何でも話す事ができた」。法主様には、「先々の事まで心配しないで、その場その場で解決していったらええ」と言って頂き楽になれた。法主様と話し終え瑞光院を出て紫陽花邑の入口の坂道を上りきると、「さあ、また明日から頑張ろう」と思えたという。ツヤ子さんにあって大倭は、「心の寄りどころ、心のやすらぐところ」であるようだ。

（聞き手 李章根）

あじさい日誌



花手塚宮の長身の花ツツジの辺りから

10月9～11日 交流の家では改修中の通称釜小屋のためのワークキャンプが行われました。

10月11日 心配した天候は回復、30人ほどの参加者で稲刈りと桿掛けが行われました。舞鶴市の藤本宏秋 早苗夫妻や樫原市の伊藤克夫さんは幼児連れで、保育班も自然発生。ぬかるみに足をとられて少し時間が長びいたが、後は恒例の宴会に。

編集部の岸野は反保良さんと庄山(田んぼの北側)の矢追隆義さん宅へ、療養中の綾子夫人のお見舞いに行くもお留守で、栗拾いさせてもらったとのこと。

10月15日 大倭神宮月次祭。
10月15～16/22～23日 大倭病院では、2班に分かれて山陰方

面へ職員旅行をしました。
10月17日 午前11時から大倭会館で、昨年10月20日に帰幽された故中島康治さんの一年祭。大勢の皆さんがお参りしました。杉本順一さんの話「祭典中に『コウジノココロワ キョウノソラ』と聞こえました。この日の空のように明るい所におられる康治さんを実感しました」。

10月23日 大倭大本宮月次祭。祭典の前にいつもお掃除や準備をしてくれている有志から「求む助っ人」の声が上がっています。ご都合のつけられる方は、どうぞよろしく！

10月25日 夕方、大倭会館で文化講演会の準備のため打ち合わせ。引き続き編集部のメンバーは教務本庁に移り編集会議。
10月30日 奈良パークホテルで邑交会が行われました。

10月31～1日 大倭会の一泊文化行事で、鎌倉方面に行きました。参加者は関東方面から来られる方が多くて新記録となる55人。個々の都合による多様な参加パターンに柔軟に対応してくれました世話役さんのお陰です。最高齢は青山日元さん(90歳)で、法義 元子 美子都一家と前日30日に車で出発して群馬県の新皇教宮にお参りして一泊、そこから鎌倉に来られるという饗鏝ぶりでした。最年少は栃木県の中野英樹 聖子夫妻の長男道大ちゃん(2歳)で人気者。また

昇ちゃんの弟、中村健さん(横須賀市 写真左側)が奥さんと江ノ島の旅館での宴会に来てくれました。詳しくは12月号で。



11月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会が行われ、法主様の奥津城整備工事について話が出されました。
11月7日 10月20日の台風23号の強風にも桿は倒れず、この日好天の下、20人ほどの参加者で脱穀が無事終了。参観日で学校帰りの子供たちも田んぼに寄って遊びました。その後、大倭会館に戻って、和やかに昼食。大豊作だったとのこと。

大倭安宿苑では
10月26日 大阪府泉南市の社会福祉法人長寿会から来苑、須加宮寮を見学されました。
(菅原園)

11月4日 すばらしい天気の中、大阪市立自然史博物館(長居公園)へ、厨房手作りのお弁当を持って遠足に行きました。
(須加宮寮)

10月14日 ピザやお寿司など各

自分の好きなものを注文して希望食事を楽しまました。
(長曾根寮)

10月24日 4階フロアで「秋の大運動会」。80名を越えるご利用者、職員が紅白に分かれて各競技で盛り上がりました。
(八重垣園)

お願いとよびかけ

法主様ご帰満10年を記念して大倭大本宮で計画しておられる法主様奥津城の整備造成に、何卒各人の分に応じご協力をお願いします。

大倭会会長 中西 正和

1. 奈良信用金庫 学園前支店 普通0302639
口座名 大本宮特別整備基金 中西正和
2. 郵便振替口座 00900-6-241836
口座名 大倭奉賛会

▼10月23日の月次祭の夕方、新潟地方に大地震のニュースが出た。日に日に阿鼻地獄の相を見せるニュースに驚きつつ、救助のニュースに仏の心、菩薩の働きを見る。10回の台風の後はこの地震、何かを思わずにはいられない。
(P)

編集後記

*** 金鶏祭(大倭神宮)**
12月4日(土) 午後2時より大倭神宮にて。
金鶏祭は、九州勢(神武側)が長曾根邑を攻めた際、天に示された金色の奇瑞によつて両軍が戈を収めたことを記念する祭典。この金色の奇瑞を金鶏といひ、和の光の象徴となつている。『やわらぎの黙示』百二十三頁「日本精神の源流」―長曾根邑のすめらみこと―参照。

*** 月次祭(大倭神宮)**
12月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*** 大倭会主催第四三三回裸会**
12月12日(日) 午前9時より恒例「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*** 月次祭(大倭神宮)**
12月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*** 日聖祭(大本宮拝殿) 及び直会演芸会**
12月23日(祝日) 大倭元旦。午前10時30分より祭典、午後1時より直会演芸会。(6頁参照)

*** 大倭神宮境内・周辺大掃除**
12月26日(日) 午前10時より行います。有志の皆さんはご参加下さい。昼食はお弁当が用意されます。

あんない